

特47-686



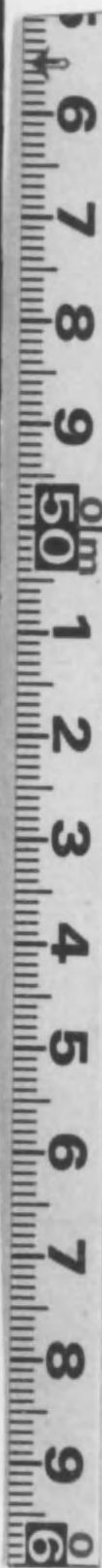
1200800205108

特47

686

日本歴史教育
児嶋高德

国立国会図書館



始



日本歴史教育
兒嶋高德



日本歴史教育
兒嶋高德



東京吉田堂藏版

兒嶋高德唱歌

漏るや笠置の雨舎を

いとかしこくも天皇は

重ある怨み高時を

義兵を擧んと奮立ち

仁義の爲には昔しよぞ

ましてや君の御爲ぞ

舟坂山も杉坂も

松の下露尚は寒く

隠岐の嶋邊に行幸せよ

天下の爲先に討たんとて

招き集り味方をは

命をすてし試あり

立てよ人々勇ましく

水の泡ある謀



特47
686



今は詮あし只一人
庭に植たる櫻木に
胸にあふる、赤心を
其名は歴史に傳はせて
唱歌の友にも知られたる

行宮指して忍び行く
のこすや十字の唐詩は
忠義に身を惜まじと
備後三郎高德と
學びの園に遊ぶ子の

天野馨作歌

日本歴史教育 兒嶋高德

機節小史編

備後三郎高德といへば國家の忠臣だといふことを知らないものはありませぬ夫れゆへ手柄を顯はした面白いお話もなか〜澤山は座います

一 跡このころといふものは鎌倉の執權北條高時が大總權威をもつばらにしまして朝廷はあるかなきかの仕打です夫れに之れまで政權といふものが臣下の手へ移つて居ますから時の帝後醍醐天皇は常にこれをお悪しみありて何か關東に事あれかしと聖意をなやませせられて居りますところへ高時は政治のみとは少しもかまはず酒や色に溺れて評判がよろしくありませぬ其のうへ

兒嶋高德

家宰の長崎高資など云ふものが我儘放題のことをして居るので家来どもはいづれも内心面白く思つて居りません。長くも後醍醐天皇には時節到來此うんを取はづさず北條氏を亡ぼして政權を朝廷に取もせうと頼りに御政治むきのことをおしらべになりました夫に大納言藤原資朝右少辨藤原俊基など云ふ豪傑を玉座ちかくお召しになり打どけた無禮講のよりあいをいたしまして密かに勤王家をあつめて居ます。處が其仲間の一人に土岐頼兼といふものがありました其また頼兼の一族に頼春といふものがあつて齋藤利行の娘を貰ひ妻として居ります。利行は六波羅の役人で關東方の味方です。油断はけして出來ませぬのです。夫をなんとおもつてか頼春は或ばんいろく妻と話をして居ります。ところ頼りに何が悲しくなつた。

見へて涙をみぼしました。妻「アあなた何をお泣きでございます。ア縁喜でもない。」頼春「イヤ、何も泣きはいたさん。」妻「イヤ、そんなことを仰しやつたつてソレ御覽遊ばせな其通りやありませんか。」頼春「こら見られて仕舞つては是非に及ばん實はこのたび鎌倉を亡ぼさんど一味のなかまに加はつたが若しも、うとであらばれれば斯して其許とはなしをする事も之れかぎりだと思ふと何となく心ばそくてツイ涙をこぼしたような譯だ。」まづたくの事實をわかしましたので妻は吃驚いたし。妻「夫はア飛でも無いこと。」と思ひました。けれど其ばんは左あらぬ跡で寐てしまひ翌朝さつそく此ことを父の利行にはなしました。が最早これが事の破滅になります。基であります。なにしる利行は鎌倉方の役人です。から斯いふ話をきいては黙つ

ては居ない直ぐにこのことを上役にうつたへると六波羅には兼てより、かような時の用心にと兵士を備へてありますゆへ不意にをくはして願兼、國長の二人を捕へようどしましたがなか、腕のきいて居りますところから暫らく敵の人数を防いで居つたけれど敵は大勢味方は無勢、とてもかなう譯はありませぬので惜いかな自殺して相果てました
さあ之からいふものは天下が穩かならぬ雲行になりまして鎌倉がたも今さらのように驚き「なにしても事の大きくならないうちに静めてしまはなければならん」と高時は兵士をドン、送つて資朝や俊基を發頭人と見なし生捕にいたしましたから畏れおしくも天皇はいたく大御心をなやませられ「かならず關東の不利になるような事はない」といふ意味の勅語を遣たまはつ

たど云は如何にも恐れおろしい次第であります
併し此位の事で朝廷の思召を換るやうな次第では停座いませぬ今度は皇子護良親王の謀を用ひ南都及び叡山の僧兵を以つて北條勢に當りイザと云つたら之で喰ひ止めやうどいたしました夫だものですから六波羅では密かに隠察を使ひまして朝廷の方々が何う云ふ意氣組であるかど云ふ事を探りますと全く形勢が種やかでありますので關東からはズン、兵を京都へ送つて「味方の不爲になるものはド、改め潰して仕舞へ」と云ふなか、
三上皇を遠い國々へ徙し奉つたる古き例があるものですから其故事にならつて再び夫れを取斗らう様にいたそうとしたから益々主上の逆鱗も烈しく俄かに兵を集めて後醍醐天皇には笠置

へ行幸遊ばすやうなみどになり追々忠臣の旗擧げに及ぶものも出来敵北條を亡ぼそうといふものもありましたが何を云ふにも勢力のある方へ附くのは普通人情全とここで義の爲めに朝廷へは味方さうと云ふものは實に少くありませんた處が茲に有名なる勤王家で河内國の住人楠正成と云ふ者がありまして勤王の間ッ先に立ち赤坂城に立籠つて旗揚げをいたしましたものですから之れが抑の小口となりなつてソロソロ北條に叛くものがあるやうになりました其多くの勤王家連中で格段だつた行ひをいたし永く歴史に其名を残して後世にまで知られたのが此備後三郎高德で座います高德は備前の國に産れて姓を見嶋ともうしたが先祖は三宅氏と云つたさうです父を範長と云ひ備後守となりました高德は其三

番目の子で「備後の三郎さん備後の三郎さん」と呼ばれたのが後に迄其名の残つた譯で座います親父範長においても、よく勤王の熱心家で座いますから後醍醐天皇にあらせられては此たび北條氏は征伐になり夫れがため兵士を笠置へ集められるといふみどを聞いて 範長これこそ誠に大事のところだ日頃朝廷へは奉公をつくしたいと思つて居たが斯ういふ宜いおりがなかつたから終い思ふばかりで夫れだけの行ひも出来なかつたやうな譯だが今度こそは主上よりの詔り是非共お味方をもうしあげなくてはならんと充分決心いたしましたして三郎高德にも其ことを相談いたしましたナニヲモ後世まで忠臣！義士！と名を残した位の人ですから夫はくなく父の範長に負けない忠義者です高德夫はお範長さんお話しがなくとも高德は何かして大御心を

徳高嶋兒

慰め奉りたく朝夕心配いたして居りましたと云ふ座います
 之はお考へ遊ばして居る場合でないから早速旗揚げを遊ばして
 は如何で座います」範長成程尤もだ夫れではすぐに一族の者
 やまた近所の者でも大分に味方にならうと云ふ人もあるから兎
 もかくも旗揚げと極めやう而して朝廷のため盡しておけば一ツ
 には之れまで胸の中に思ひふくめたどりの主義も立ち二ツに
 は朝廷へ御味方もうすと云へば例へば此まゝ死んだところでも
 ラ、命は惜くない」高德全くそれに相違座いません一刻も
 早く御旗揚げをねがひます父上全くこの腕が鳴つて居るやうな
 心持がいたしますとソコで親子の相談もすつかり取りましまし
 たからな、味方の人敷を集めてイザと云は、御加勢のため
 押出さうと云ふ支度に忙がしくありました



兒嶋父子意を決して勤王心を起す

處が高德等の軍備最中に行在所の笠置も落城いたして仕舞ひ勤
王家の楠正成さへも敢なく敵の爲めにはろぼされ自殺したと云
ふ知らせを聞いて高德は素よりの事父範長もたいそう落膽して
迎も斯ういふわけでは僅かばかりの兵で京都へ上つたところが
仕方がない未だ旗上げをしたと云ふわけでもないから今すみし
のあいだ折を見て居やう又そのうちには良い時節も参るだらう
と父子のものは相談をきめまして語り見合せと云ふみどになり
ました夫からと云ふものは高德は何かして京都の風聞をきいた
いものだと毎日爲ることも手に付かずいろく噂をさやつて
居りますと茲に又々高德が人数を集めて一評議しなければなら
んふどが出来ました夫は外でもありませんが此度後醍醐天皇に
於かせられては終に北條高時の爲めに隱岐の國へと遷させられ

給ふと云ふ事を聞きサア如何にも此れが心外で堪りません「俺
れ悪い北條高時畏れ多くも一天萬乗の君を臣下の身として遠き
嶋國へ遷し給ふなぞ言語全斷の曲者だいつまで此まゝにおかう
かおのれ高時今に何うするか見て居れ」と東の方をにらみつめ齒
を喰しばつて無念の涙をながしましたが「イヤ待て〜隱岐の
國へ行幸あそばすからには必ず此中國筋を御通りにならないこ
どはあるまい其時をはかり主上を此方へ奪ひ取り奉まされから
直ぐに近國へ布令を廻して義兵をあげたなら殊によればはかり
ここの成らないこともあるまいと深く決心をいたしまして之よ
り一族の者から家來の衆を殘らず召びあつめました
ッコで高德は一同の味方があつまつたところで只今で言へば一場
の演舌をして人の氣を引き立てるのですが此頃は當時のよう

演舌會どもやしませんでしたらう兎に角高德は自分のもくろみ
ですから一同の前へ出で意見を述べました「志士仁人は己れの
命ちがほしい爲めに仁をそこなう様なこともなく必ず己れの命
ちを縮めても仁を行ひ遣りどげるものである殊には古しへより
の體にも義を見てせざるは勇なしと云ふから仁義の爲めには命
をなげうつて之を全ふしなればならない夫に就ては既に一同
も承知だらうが此度主上には畏れ多くも賊臣北條高時の爲め
に隠岐の島邊へ行幸あそばすとのこと夫を承知いたした上から
ば臣下の身として手を束ねて見て居ることの出来べき筈がない
夫れ故御臨幸あそばさせられる道すがら君を奪ひ取り奉り大軍
をおこして天下に義兵を唱へたならば必ず味方の者も夫々旗上
げをして北條に叛くものも出来るに相違ない武士たるものが戸

を戰場にさらし君の爲め忠義を盡したと云へば夫れを武門の
面目此上もないことで子孫にいたるまで其名を傳へるとすも
のであるが何と各々方某しの相談に乗つて賛成を致しては呉れ
まいか」と慷慨悲憤の涙をふるつて一同の者に協議をいたしま
ど何れも高德の召しに應じて来る位の武士ですから否と云ふも
の一人もない「成程夫は尤もこのことだ一刻も早く軍の支度を
して君を奪ひ取り奉り天下に義兵を挙げたいものだ」と異口同音
に賛成いたします、高德はこのありさまを見て「高德」早速の御承
知で恭けけない、デは早速其用意に取かすらなくてはならんが何
も御通行になる道筋の險阻なところで待伏せを仕て居り不意に
討つて出なかつたら無事に此方の勝利になるふとは覺束なから
う」「夫れは至極面白い、はかりごとだ、ナニシロ此方は人数も少し

徳高嶋兒

するから並一通りの事では迎も勝つことは出来まいと茲で手筈の相談も極つて一同の者に指圖をいたし高德之を率き連れまして備前と播磨の國境ひなる舟坂山の山中に隠れしので今や々々ど待もうけて居りました
幾ら待つて居ても更に御臨幸の模様がありませんので高德も不思議に思ひました「ナニヲも斯う遅くなる筈はないが之れでは余り手間が取れ過ぎる何か途中に仔細がなくは成らないと直ぐに使の者を走らせて様子を見せに遣つたところが何も案外なことになりゆきました
暫らくすると使の者が歸つて参りました高德は左も待ちくたびれたと云はんばかりに高德何だ様子は明つたか「ハイ大概様子は探つて参りましたが残念ながら此道筋は御通りにはなりません」高德「ナニ御通りには成らんとワテ」確かな証據でもあ

徳高嶋兒

せん「高德」ナニ御通りには成らんとワテ「確かな証據でもあることか」「ハイ警固の武士どもは山陽道へはかゝりませんで播磨の今宿から山陰道へかゝりましたから此處は必ず御通りにはなりません何時まで待つても益のないこと早速何どか御工夫をめぐらせられることが肝要かと存じます」高德も之れまで思ひ企だてたことが案に相違して仕舞ひましたので暫らくは惘然として考へて居りますが、ト云つて此儘に致すも口惜しき次第であるに依り一同の者に向ひ高德折角茲まで来て待ちもうけて居たけれど今聞く通りの始末だから何しても之れから一層勇氣を奮つて先きへ廻り其處で待伏せいたすことに仕なければならん夫れに就ても美作の杉坂ならば屈竟の深山ではあるし旗上げをいたすにも何するにも要害は此上もないところだに依り間道を通

つて是非とも其處まで往かなくてはならぬが一同の決心は「
夫れはすすまでもないことです既に命も投げ出して懸つた仕事
ですもの今更ら止めるなんぞとッンな卑怯なことがありましよ
うか直ぐ之から出發をいたして先を越すやうなことに致しまし
よう」と一同の者も非常な意氣ぐみでありますから去らばと高徳
は三石の山より筋違ひに道もないところの山を通り抜け刑で手
足をきづを付けるやらなか〜大變な一通りならぬ難義をいた
しまして漸くのこと杉坂へと着ましたところ又々残念なるかな
主上にはハヤ其さきの院の庄へと入らせ給ひて折角の心苦も水
の泡となりました一同の者に於いても張り詰めし力も抜けて
一同扱々天も皆の者の志を憐れんで下さらぬのか知らん仕る
こと爲すことくひ違ひ一つとして成就しないと云ふのは誠に殘

念なることであるが之も時節で仕方がない未だ運が循つて來な
いのだらうと齒ぎしりをして居ります高徳も一同の者が勇氣を
おつて落膽いたしましたようすを見て高徳「ア、此れは到底だ
めだ自分一人で出来る仕事ではなし一同の者が氣をそろへて遣
つたどころでなか〜骨の折れる一大事であるものを況して斯
う云ふ失望の有様では仕方がないア、無念ながら茲で一先づ解
散をいたすより外はない」と高徳もよんどころなくあきらめて
高徳「デは一同の衆折角此れまで骨を折つて下すつたが最早こう
なつては仕方が座るまい又た時節を考へて旗上げをすること
もあらうから今度は一先づ此處を立退くと云ふことにいたしま
しやう」と大將分の高徳が斯う言ひ出したのですから終に一同の
者も思ひ〜に故郷を指して立歸りました跡に残つた備後の三

徳高嶋兒

郎 高徳ア、残念の事だ」と涙をながしながら一同のたちさる後ろかけを恨めしげに見送り又院の庄の方を眺めてはハッ／＼と涙に暮れて居りましたが屹と心を取直しまして 高徳「イヤ誤まつた誤まつた女らしく涙なぞをふぼす場合ではない切めては之れ程に思ふ誠心を上聞に達し仮令少しばかりにても大御心を慰め奉らなくては成らん」と夫れから賤しき者の妻になり密と行在所のあたりへ参り様子を窺ひました
併し警固はなか／＼厳しう傍座いまして直ぐには近寄り奉ることも出出来ない尤も其筈です千葉介貞胤、小山の五郎左衛門、佐々木佐波の判官等五百余騎でもつて途中をかためて居りますし主上のお側に侍る者は一條頭の太夫行房、六條の少將忠顯、三位の御局ばかり其外の者は何れも鎧甲に身を固め弓矢を取つたる關東武

徳高嶋兒

士ばかりで座いますから如何に高徳が俺れ一人で彼此とおもつたどろで仕方がないのは無理のないことであります
其内に追々ど夜も更けて参りましたし簞も消ぬて誓固の武士どもも旅のつかれかコク／＼と居眠りをはじめました高徳は物の蔭からソツと此有様を見まして 高徳「占た／＼何か此分ならせめては御宿の御庭までも忍び込み何がなして自分の所存を難へ上げる事も出来そうなものだ」と足音をぬすみまして彼方こつちと見廻して居りますすが誰一人氣の付いたものが座いませんのは之れこそ天の助けでは座いまいしやう、夫から漸どのことでお庭先きまで忍びこみました何が良い手蔓もないソコで不圖側を見ますと一本の大きな櫻の木がありました櫻の花と云へば日本一の武士の魂にも例へられたほどの名花で傍座いますから自己

徳 高 嶋 兒

の赤心とあかして書き付けには持てこひと云ふ木では座い升
 高德も外に仕方がありませんから此大きな櫻の木を削りまして
 矢立の筆を取出し墨くろくど一首の詩を書き付けました

天 莫 空 勾 踐
 時 非 無 茫 畫

と云ふ誠に字数はすくのうは座いでしたが如何にも忠義の心を
 こめた詩で傍座います 高德ア、斯うして置けば朝になつてだ
 れか見付ける者があるに相違ないソウするときは自然と主上
 の教間にも達し奉るやうな譯になるだらうと遙かに館の方へ手
 を付きまして幾度か伏し拜みいづくともなく立去りました
 夜が明けますと案のこどく警固の武士が之を見付けまして「ア
 ヤ此は不思議だ、いつのか間に人がはいつて来て庭の櫻をけづッ



高德の
 心中
 揮樹を
 残して
 去る

たり此様なものを書いて往つたか知らん、いつ此處へ人が来たんだらう』とお互に顔を見合して不思議におもつて居りますケレども字を知らないどころの武士たちには何の字だかさつぱり讀めない三人寄れば文珠の智慧と云ひますが三人どころか我も我もどワイ〜言つて櫻の木の下へ来て見ますが扱分るものは一人も居りません詰り満足に讀み下しも出来ない人ばかりです其内に頭立つたものが参りまして「コラ〜何を喚いで居るんだ餘まれ〜」と云ひながらヒョツと櫻の木を見ると六ヶ敷い字が十字書いてある「何だ之りやア」「夫れがよめないんで皆なが今考へ中なんで座いますすが何もさつぱり譯が分りませんでマア一体那りやア何と讀んで座いますしやうか」「爾うさのう少と俺にもおぼつかないが何時のまに何者が忍び込んで斯う云ふことを

かいたのであらうか』と頻りに考へて居りましたが「之は何時見付け出したんだか分つて居るのか」「ハイたつた今見つけたばかりで」「何時なものか忍び込んで箇様に認めただか番の者共も氣が付かなかつたのか」「どうも別に氣も注ぎませんで」「左様なことでは困るではないか若しも敵方の廻し者でもあつたら夫れこそ一大事だ以來は能く氣を注げなくては相成りませんぞ」と自分が讀めないと云ふのも残念だと見えて頭立つた役人は早速此場を去つて大將に上る、どるろが誰一人意味の分る者がありません

モ一斯うなつては仕方が座いませんに依り此事を上聞に達し奉りますと畏れ多くも主上には此十字の詩を覺り遊ばされて誰か朝廷の爲めに盡す忠義な武士があるなど云ふ事を知らせら

せ給ひ遙かに遠く隠岐の島國へ遷させられ奉るに於ても頼み強
く行幸あらせられたことでは座いまいしよろ、ケレども警固の武士
どもには分らないからと云つて別段せんぎするでもなく其まじ
になつて評議は之で立消ぬとなりましたが夫れより出雲の國三
尾の港に十余日逗留に相成り風都合も宜しくなつた云ふの
で船人は帆をどき三百余の船が前やら後やら取圍いて隠岐の國
に幸させらるしどは實においたはしき事では座います
北條高時は長れ多くも主上に迫り奉り隠岐の島邊へ行幸を願う
やうな我儘一ばいなる振舞をいたしますが一ツとして自分の言
ふことの通らないことは座いせんにより「ナニ關東に向つ
て橋をつくやうな者があつても最早恐れるところはな」と云つ
て益々權威をふるひますから追々ど振く者は澤山になるばかり

であまます其内は一たん笠置がやゑれて跡をくらまされたる處
子護良親王が再び兵を吉野に起すやら赤坂城が落ちたときに死
んだと思つた正成が全剛山千原の城をきづいて義兵を揚るやら
赤松則村は護良親王の命を受けて播磨に旗を掲げるやら勤王の
兵は以前に増して勢ひなか／＼盛んでありますスルど高時は今
更のやうに狼狽へまはり頼りに兵をくりだしましたが金剛山の
如きは正成の立こもつて居りますことだからなか／＼急に攻め
落す杯と云ふことは出来ません
其内に隠岐へ行幸せられたる後醍醐天皇には六條少將忠顯を従
へられまして名和の港へと密に幸させられ土地の豪傑名和長年
に詔を下し之から船上山へと立籠りましたが何をすすにも誠に
早急なばあいですから兵糧やら武器やらなか／＼思ふやうには

徳高嶋兒

そろひません、併し名和と云へば此近在での豪族ですから兵糧米の貯へもありません、米でも麦でも一俵かついで山迄はこんで行けば餓死す、ソコで米でも麦でも一俵かついで山迄はこんで行けば餓死す、五百文づゝ遣るといふ建札をだしましたので村の百姓はやすに及ばず近在の者が大勢参つて一日の内に五千石あまりも船上山へ運びました斯ういふ勢ひですが、忽ちの間に倉に入れておる分だけは運びつくして仕舞ひましたので、長年もホツと一息吐き「マア之れて良かつた此分なら十日二十日の兵糧米には不自由は無無し其内には追々ど味方の官軍も聚まるだらうとソコで充分に謀ごとをばきめまして自分の邸はやさばらひ百五十騎を率きつれて愈々行在所を護ることになまました、けれども何を云ふにも人数と云つたら百五十人ばかりしか居ないんですからよ

徳高嶋兒

はい音を吹いて居たんで、とても戦争をすることは出来ません、此で思ひ付いた一ツの計略と云ふのは、近國に住う豪族の旗じるしをそれと拵らへて、夫れを木の影へ建てかけて置きました、丁度遠方から見ますると山の頂きには數萬の人数が立籠つて居るやうで、旗は山風にひるがへり時々「フー」「フー」と吶喊の聲を挙げますから、敵も容易にせまらせません、此時討手として向つて来た賊兵は、佐々木清高では座います、何しても自分が開東からお預りになつて居る大事な役目を持つて居るに、主上には密かに隠岐の島を立去り、船上山へ行在所を設けられて見ますと如何にも自分の役目に落度があります、こうなるど、賊ながら一生懸命になりまして、山の前後からせめ懸りました、處が遙か山の上を望んで見るに、近國諸大名の旗じるしは風はヒ

徳高嶋兒

ラ、と、こゝつて居りますので、清高扱は不思議だおかしい譯だ
ぞ爾う急に近國の大將達が味方をする筈はないと思ふが、なに
しろ事の起りが二三日前の事だのにあんなに嚴重なかまへの出
来るはずがない、是は大方計略だらうド、進んでせめ込もう
か、イヤ、若しも旗じるし丈けの人数が立籠つて居た時には大
變だ一討に破られて仕舞うが如何いたしたものだらうと清高も
迷ひが出て仕舞ひました誰でも此迷ひが出るも兎角物事を遣り
そくなうもので進みもしなければ退きもせず山の中はせに清
高は兵を扣へて考へこんで仕舞つて居た此時官軍に於ては賊兵
がたちおうとやうを仕舞つたのを見て林の中を通りぬけ密
と裏手の方へ廻り樹の蔭からして弓取りの名人が敵の大將
分どもおぼしき者に付けて兵アツと切つた矢は誤たず思ふ大將

徳高嶋兒

を射殺しました之れがため此手の人数八百人と云ふものは降参
して仕舞ひました
ソ、な、事、が、あ、ら、う、と、は、知、り、ま、せ、ん、の、で、清、高、は、思、案、を、し、か、へ、て、急
に、せ、め、登、る、て、は、づ、に、い、た、し、ま、す、と、日、の、暮、れ、方、か、ら、し、て、大、雷、で、雨
は、降、る、し、風、は、吹、く、し、物、す、さ、ま、じ、き、有、様、で、は、座、い、ま、す、流、石、の、清、高
も、折、が、悪、い、と、思、つ、て、扣、へ、て、居、る、と、遙、か、に、山、の、上、か、ら、之、を、見、す、か
した名和の一族「得たりかしこし斯ういふ時に敵をやぶらなけ
れば又と勝つことは出来なぞ夫れ進め進めと勢ひに乗じてせ
め下り忽ち討つて賊兵千人あまりも谷へおとし清高はほうく
の跡で逃げ出して仕舞つた爾ういふ勢ですから山陰山陽の將士
にいたるまで二心を持つて居た者は何れも官軍へ附くと云ふわ
けになつて旭日の昇るばかりの勢でありました丁度そこへ駆け

徳高嶋兒

付けて御味方に参つたのが備後三郎高德で伊座います
船上山に立籠れる官軍方は大に勇み立ち之から京都へせめ上り
六波羅を破らんものをと第六の皇子を大將とし源忠顯を副將と
いたし高德等を従へさへて敵の本陣なる六波羅へとせめ懸りま
した、ところが散々賊の爲めに破られて七千騎あまりも殺され
て仕舞つたから忠顯は如何にも望を失ひ、がつかりして仕舞つて
居る殊には一方の大將分と頼む者が伊座いませんので早速本陣
峯の堂まで参るやうにと高德のもとへ使をつかはし呼寄せまし
た 忠顯「三郎殿わざ／＼呼びましたも外では伊座らんがナト
其許には相談がありまして」高德「何事で伊座るか早速承りまし
よう」忠顯「イヤ實は御覽の通りの敗北でいづれも將士はつかれ
はて再びたゝかう氣力もないくらひ此れで此儘都近くに陣を構

徳高嶋兒

へて居たことならば却つて敵の爲めになやまされるようなこと
でも出来は仕ないかど實は夫が心配な譯夫れゆへ境をへだて
陣を取り追付近國の兵が集つたところで再び六波羅を攻めたな
ら勝てぬこともあるまいと思ふが此議は如何いたしたもので伊
座らうか「高德は此一言を聞くか聞かぬ内に余り臆病なことを言
ふ者かなど心中大きに立腹しましたから少し言葉も荒くなりま
して 高德「之は又改まつて何のお尋ねかと思ひましたら卑怯千
萬なふと軍のせうふと云ふものはもど／＼時の運次第なもの負
けたとて決して恥かしいことも伊座るまい只退むとくところを退
かずに居たり進むところを進まずに居るのが之は大將の手落ち
と申すもの假令此度の戦ひに破れヨシ半分過ぎ討たれたにした
ところに残るところの軍勢は未だ六波羅の人数よりも多く伊座

徳 高 嶋 兒

るふとは既に承知のはづ殊に此陣處と云ふものは後ろは山前
 は河たどへ敵が押寄せて来たところて好むところの取手では座
 る決して此處をお引取りになるなどの事は夢にも思ひ給はぬ様
 高德堅く留め申す夫れども又味方のつかれたところへ付け
 込んで敵が夜討でも致すと云ふ御心配があるならば此高德は七
 條の橋詰に陣をしいて待受けましやう其外四五百騎梅津法輪の
 渡しへ差向けて警固をさせたなら決しては心配なことは座ら
 ぬ陣拂ひなどはは無用千萬に遊ばすやうにと充分に勢を付け
 まして自分ば三百人あまりの兵を引きつれ七條の橋から西のは
 うへと陣を取つて居りましたは扱々高德の度胸はたいしたもの
 でありませす
 忠願もなか〜魔のすはつた大將ですが何も此日ばかりは臆病



七條橋
 高德
 忠願
 と對陣に

風にさそはれたものを見へて幾ら高德に異見されましても峯の
堂に落付て居る譯に往きません夫に敵から夜討がかつたこと
ならばなぞ、謂はれたので猶更ら居たたまれなくなりましてト
ウ、夜半すぎに宮を御馬に乗せ奉り葉室の前をすぢがひに八
幡を指して落延びました
備後三郎は斯なことでしは知りません夜が更け行くに従つて峰の
堂から八幡の方へ松火の光りがつきます高德之れは怪しか
らんこともあるものだ此有様では大方大將の何れへか落行くこ
とに相違あるまいと之から様子を探るため葉室大路から峯の堂
へかけて往つて見ると丁度淨住寺の前で荻野彦六朝忠に出逢ひ
ました高德彦六殿朝忠之は三郎殿何れへお越しに相成りま
するぞ大將には既に本陣を引拂ひになつて落させ給ふからは非

なく之より丹波の方へ下らうと思ふところであるが貴殿にも
同道あつては如何で涉座るか之を聞いた備後の三郎大それた腹を
立つて高德あれ程は意見して置たのに本陣引拂ひとは何事
だらう斯んな臆病な者を大將として居るこそ當方の越度とも云
ふ可き事だ、ケレども直々様子を見届けて參らなければ後々何な
難義が起るまいとも限らない彦六殿貴殿には一足お先きへ三郎
は之れから峯の堂へ上つて宮の御跡を見届けて奉り追付跡よりま
へりますから朝忠然らば一足先きへ参りて見届けて奉り追付跡よりま
朝忠は丹波路差して下ります高德は手勢を籠へどいめて置き已
れは只一人落行人數のなかを押分けて漸くのことと峯の堂へ上
り大將のおはしましたる本堂へ遣入つて見たところ、よく、あ
はてたものと見へて錦の御旗や鍍直垂にいたるまで悉く取捨て

徳高嶋兒

しほ座います備後三郎之を見て益々腹を立て 高德「エ、忍々し
い斯んな卑怯未練な大將は谷か堀へでも落ちて死んで仕舞へ」と
ひとりごとを云ひながら本堂の椽へドツカと腰を掛け頼りに無
念の涙にくれて居りますが高徳「ア、いつまで此處で大將をう
らんだどころでもう跡の祭りだ定めし人数の者共も待ち兼ねて居
ることだらう」と思ひましたにより錦のはたばかりは拾ひ取つて
家來の者に持たせ淨住寺の前へと急ぎかへりまして之から手の
者を引き連れ馬を飛ばして追分宿のあたりで萩野彦六にあひま
した 朝忠「何じや三郎どのすつかり跡を見届けて参られたか」
高德「イヤもう跡の仕末には驚いて仕舞つた錦の旗は捨てしある
し鐘直垂は其儘になつて居るし克く〜」 徳「落したものと見
ぬてお咄しになつたものじやア座らんで」 朝忠「左様では座つ

徳高嶋兒

たらう定めし見苦しい跡の仕末で互にはなしながら朝忠は高
徳と共に丹波丹後出雲伯耆へ落ち行く人数をあつめて道々野武
士どもをおひはらひ丹波國高山寺の城へと立籠りましたが高徳
の心中はさだめし残念のことで座いたしましたらう
其内に追々諸國に義兵を擧るものが蜂の如くにおこり立ち中
にも關東にては新田義貞が護良親王の令旨を奉じ兵を起して直
ちに鎌倉をせめましたのがナニしろ本陣を討たれることですか
鎌倉勢も必死になつて拒ぎました左れども遂に義貞の爲めにせ
め敗られさしにも盛つた北條家も九代にして滅ぶる始末になり
ました夫れが爲め本がたはれて仕舞つたので枝葉の六波羅では
いかに何いたそらにも仕方ありません其内に楠正成の立籠つ
たる金剛山千早の城も圓みが解けましたに依り主上も都へ御還

兒嶋高徳

幸遊ばされずを兵庫までお出迎ひ申上げ、こゝにて拜講を仰せ
つけられました之からつゝがなく主上にも京都へ御着筆になり
年號も改たまつて建武となり最初の御目論見の通り政權を朝廷
に握るこの出来ませうやうになつては誠に目出度きふとで座
います
然るどころ茲に又第二の北條高時ども云ふ可き叛逆人があらは
れました之は誰かど云へば足利尊氏と云ふ悪むべき、わるもので
あります、ナニしても此時分といふものは家筋が悪かつたら折角
手柄を立てたところでも何れも重く用ゐられません然るところの
尊氏といふものは頗る名の高い家筋でありまして建武中興の業
を成したのも個へに之れは尊氏の功となすやうな譯です夫れ故
正成義貞等の上へ振んで、領地も武藏、遠江、常陸、下総の四ヶ國を

兒嶋高徳

賜はるやうな譯で座います、夫れでも尊氏は未だ不足に思つて
居て遂に叛反をいたすやうな譯になつたのですが何も尊氏の功
と云つたところでも初めは北條勢の爲め討手の大將となつて居た
ものが後に變がへつて官軍についたやうな始末で尋常に公平な
咄しをしたならば決してソんな不足に出來るなどの事はないの
であります夫れを不足に思ふと云ふのは詰り自分が名ある家柄
だど云ふのを鼻に懸けての譯であります
尊氏は叛逆をくはだて朝廷に背きましたか何しろ名ある家柄で
ある上に此時の賞賜といふものが残念なるかな少しも公平でな
かつたから大將より下兵卒にいたるまで事あれかしと待構へて
居たどころですゆへ堪りません殊に尊氏は朝敵ながらもなか
賢い人物でありましたから忽ちの内に將士の心を寄せせるもの

徳高嶋兒

も多く大勢の人数が味方をいたしましたから直ぐに京都へ攻め上りましたが未だ此時は官軍にも義貞正成どうの軍略家が揃つて居ますからう思ふやうに乗取る譯には参らない歴々戦つたのち終に足利勢は敗北いたし尊氏は西國へ落ち延ぶる始末になりました此時正成は急に跡を追かけて尊氏を討取り後の難義をのぞかうと思つて義貞にせまりましたが義貞はグヅグヅ隙を取つて居たために容易に出發いたしませんが余り度々正成から催促をされますんで三月も延びた後からして西國を指して攻め下つたがもう此時は尊氏の味方は充分出來て仕舞つたから間に合はない中國の道筋にある有名な城々は何れも敵に加勢をいたして官軍に弓を彎くやうな次第では座いました此時四方皆敵のなかに取圍まれて居る内に獨り備かな軍勢を持

徳高嶋兒

つて官軍の爲めに力を盡したのは誰でありましようか備後三郎一人であります高徳は僅かの軍勢をもつて備後國福山城を攻めました但最终に軍がやぶれたので夫れが爲め部下の兵がしきりとそむきます、そこで據せよろなく備前の三石山に逃れて密かに敵の様子を覗つて居ると幸ひにも新田義貞朝臣には兵を率ひて西國に下り義貞の弟義助は備前の舟坂を攻めると云ふことを聞き及びましたから高徳はいたく喜こび使の者を義助の陣へおくりデキデキ義助に才上させました其口上は「三石の南には抜け道がありました之は余り人の之れ迄知らない處でありますそこを通つて眞直にゆけば舟坂のうしろへ出ますから私しは兵を熊山に起して賊の兵を二ツに分けさせ城の人数を少なくさせましよう、爾うしたとこ

ろで義助公には正面と間道と双方より夾みうちにしたせば決し
て舟坂の抜けないことはありますまい舟坂さへ取れば西國の者
は自然と降参するやうになりましよからと密々に相談をいた
させます之を聞いた義助は大に喜ぶんで相圖の日を定め使の者
を返ししました
互に相圖の約束も定りましたから然らばと云ふんで約束の前夜
で座います高徳は己れの館へ火を懸けて僅か二十五騎にて熊
山へど打つて出ました何が云ふにも早急の場合ですから少し
遠國に居る一族の者は間に合ひません近邊に居る者ばかりに知
らせまして漸く二百人あまりの軍勢が出来ましたから夫れを道
々あつめて夜中熊山へ登り四方にかかりをたいて大勢立籠つて
居るやうな勢ひを見せすものだから案の如くに舟坂の賊兵三

千余人を引き分けて熊山へ向つて來ました一体此熊山と云ふの
は高さは比叡山ぐらひで四方に七ヶ處のみちがあります夫れで
其みちはどれもなく、一嶮岨でもつて守るに易く攻むるに難義
などころでありますから高徳は僅かの人數を此七ヶ處のみちへ、
くばつておいて四方の敵をふせがせす、どころが敵兵は人數が
澤山ですから追下ろす、又責めのぼつて來るし實に始末に困り
ましたが元々義助と相圖の約束がありますことですから熊と時
をうつして居ると其内に日はドツプリ暮れて仕舞つた、スルと寄
手の人數の内に石戸彦三郎と云ふ者があつて此山の案内を知つ
て居りますことか思ひも寄らぬ抜みちから本堂の後の峰でツ
ツツツと聞の聲を挙げました高徳「スハ、そ一大事なり敵は抜
みちを心得て攻め上つたと見ゆる併し何はどのこどがあるもの

徳 高 嶋 兒

かゝる僅か十四五人残つて居る軍兵に言ひ付けて自分が前さだち
 になり押し寄せて来た二百騎ばかりの人数の中へきり込んで火
 花をちらし戦ひました悲しひかな暗さはくらし闇の夜のこと
 座いますから高德は戦ひ乍ら大疵を受けましたけれど良い
 梅に賊兵をば討ち走らせて仕舞つたのは誠に目出たい事であり
 ました高德はホッと一息吐くと全時に傷所のために眼がグラッ
 ヲと昏みましてガククリそこへ仆れました父備後守範長は驚い
 て種々介抱したが更にしるしがない 範長之れはとて只の
 療治では叶はないヨッ／＼一ツ謀ごとで息を吐き返さして遣ら
 うと雖の事枕のそばへ差寄りまして 範長如何に三郎克く承
 はれ昔し鎌倉の權五郎景政は左の眼を射抜かれながら三日三晩
 まで其矢を抜ず當の矢を射返したりと美談を今に傳へられたる



に是程の小事一々所位の爲め死ぬと云ふ事があるか夫れ程言ひ
甲斐なき心にて此一大事を企つるとは俺れ卑怯者奴がと大きな
聲で恥しめましたものですから高徳は父の言葉が耳につうじた
と見ゆ忽ち息を吹き返して高徳よし、已れを馬に乗せて呉
れ今一軍して敵を追拂うからと立揚つたから範長も大いに悦び
範長此分なら正逆に死も仕まいからと再び勝軍の闘を作りまし
た
義助は高徳の合圖がありましたから一方は間道から一方は正面
からと云ふ搦梅で舟坂を攻めたものだから敵も不意を喰つて終に
城を捨てて遁出しましたが夫れが爲め手もなく舟坂は官軍の乗
取る處ろとなり福山へは別に大將を置いて守らせることに致しま
した

此時義貞朝臣には赤松則村の立備つたる白旗城を攻めて居りま
した一休此則村は初めは官軍の爲めに力を盡したのですが尊氏
が兵を擧げてからは賊の味方をして西國へ下るには尤も肝心の
要害である白旗城に據り茲で義貞を喰ひどめて居る其内に尊氏
は弟直義と水陸よとして京都をさし攻め上るふどになりました
から其知らせと云ふものは櫛の齒をひくごとく跡から御注
進御注進と頼りに警報が参ります然るとふる福山の城も終に賊
兵の爲めに破られ義助もよんどころなく兵を率き連れ退くやう
な場合になりましたから高徳も共に義助に力を合してせめては
山を越ぬ京都をさして登らうと思つたけれど如何せん此程受け
た疵所が何分にも病めて馬にも乗る事の出來ぬやうな譯です據
てころは座いませんから之よりして佐越の邊に知合の寺があつ

徳高嶋兒

て住持とも懸意の間柄ですから當分其處へ厄介になつて疵療治
をするにきめました
父の範長は三郎の落付き塙所が出来たものですから一先づ安心
いたし是から生残つたる人数八十騎ばかりを従へて義助の跡を
追ひ懸けます折ふし義貞も白旗城の圍みを釋いて都へ返るとこ
ろですから赤松の兵士は城から出で道筋を固めて居りますと運
の悪さよ範長は丁度其處へどうりかゝりました「これゝ落人
ども其處へ参るのは誰だ命が欲しいなら弓の弦をはづし甲を脱い
で降参をしる爾うすれば赦して遣らない事もないから」範長は此
一言を聞いて火の玉のやうに怒りました「範長何をおのれ生意
氣な降参呼はり降参する位なら筑紫から遙々將軍の御教書をも
つていざなはれたときに降参するは夫れさへ引裂いて火にくべ

徳高嶋兒

た此備後守範長が何で御邊達に降参しやうか左程鎧甲がほしい
なら見事取つてから降参させて見ろとカラゝと笑ひながら八
十騎の人数に差圖をいたし三百人あまりの赤松勢へ斬つて入り
蹴散らして通らうといたしました處へ野武士どもは大勢むらが
りおこり終に夫れが爲めに八十人の人数を僅か六人しか残しま
せん跡はいづれも敵の爲めに打死をいたしたので今は範長も之
れ迄と思ひ或辻堂の前に馬を立てゝ範長「ア、一族の者残らず
参つたならば播磨の國ぐらひは安々と蹴散し通るものの方々の
討手に向つて居るので一族の者が一ツ所に居ないため此範長
の運命も今日かぎだ今は通れる道もないから最後の念佛でも
唱へ腹かつさばいと閻魔大王の許へ参らうと馬より飛おり残る
六人のつはものに追ひ來る敵兵を拒せがせて已れは辻堂の内へ

はいり本尊の前で念佛を唱へ見事に腹を切つて死にましたは實
に惜しむ可き忠臣でありませす
是からと云ふものは尊氏直義が率き連れたる水陸の大軍京都へ
攻め登りませすし忠臣の楠正成は湊川に於て打死いたすやうな始
末ですから官軍の勢は日一日と衰へるばかりで涉座います夫れ
が爲め主上は再び叡山に行幸いたすやうな譯ですが又程なく源
忠顯も戦ひの爲めに命を捨て名和長年も討死して仕舞ひ獨り目
指す官軍の大將分は新田義貞ばかりでありませす其内に尊氏は自
ら光明帝をもりたてましたから主上には吉野へ行幸あらせられ
て茲に行在所をたてられましたたが素より吉野は御正統故之を南
朝と唱へ尊氏のもり立てしは之を北朝と唱へました
南北兩朝の分れるやうな有様になりませしたたが此時南朝には正成

の一子正行義兵を擧げて勢ひ頗る盛んで涉座います義貞は皇子
恒良親王及び尊良親王の御二方を奉じて北國へ参りませした詰り
北國征伐で涉座いますが高徳は此時病ひも漸く癒りませしたによ
り義貞に附いて北國へ参りませした何を云ふにも大將と頂く義貞
さへも余り北國征伐などは面白く思はない詔りどあればこそ據
どころなく参るやうなものに誠にも軍氣も振はぬやうなわけであ
ります高徳は頻りに義貞をなぐさめ種々謀事をめぐらして敵を
破つたが終に義貞も打死いたしたに依り據どみろなく義貞と北
國を去つて伊豫へ赴いた然るに義助も病の爲めに没したから高
徳は據どころなく備前をさして歸りませした
之からと云ふ物は天下悉く賊軍の爲めに働らくと云ふやうな譯
ですから忠臣の人々も兎角く勢を振ふことが出来ず楠正成和田

徳 高 嶋 兒

日本歴史教育 兒嶋高德畢

正忠など類りに南朝の爲めに盡しますすけれども少しも戦つて甲斐のないやうな場合ですから高德も最早時勢の如何ともすべからざることを悟り頭を剃つて吉野へ参り夫より東北地方を遊説してあるき官軍の味方をこしらへやうとしたが南朝の勢ひ日々に委まるばかりですから終に夫れも成り立たず頭を丸めたのを幸ひに世を捨て、之より勤王家が朝廷の爲め打死したる人々の冥福を祈り終に行術も知れぬと云ふは亂世の時とは云ひ乍ら是非のなき事でありませす左れども立てしいさはしこそ永く後世に傳へられ忠臣の鑑と仰がれますは高德の徳では座いませしやう

明治卅三年十一月十二日印刷
明治卅三年十一月十六日發行

編輯兼
發行者

中村惣次郎

東京市淺草區馬道町一丁目五號十四番地

印刷者

大場沃美

東京市神田區南乗物町十五番地

印刷所

龍雲堂

東京市神田區南乗物町十五番地

不許複製

徳高嶋兒

日本歴史教育 兒嶋高德畢

正忠なき頼りに南朝の爲めに盡しますすけれども戦つて甲斐
 のないやうな場合ですから高德も最早時勢の如何ともすべから
 ざることを悟り頭を割つて吉野へ参り夫より東北地方を遊説し
 てあるき官軍の味方をこしらへやうとしたが南朝の勢ひ日々
 委まらるばかりですから終に夫れも成り立たず頭を丸めたのを幸
 ひに世を捨て之より勤王家が朝廷の爲め打死したる人々の冥
 福を祈り終に行術も知れぬと云ふは亂世の時とは云ひ乍ら是非
 のなき事であります左れども立てしいさはしこそ永く後世に傳
 へられ忠臣の鑑と仰がれますは高德の徳では座いませしやう

明治卅三年十一月十二日印刷
明治卅三年十一月十六日發行

編輯者 兼 發行者

中村惣次郎

東京市淺草區馬道町一丁目五號十四番地

印刷者

大場沃美

東京市神田區南乗物町十五番地

不許複製

印刷所

龍雲堂

東京市神田區南乗物町十五番地

●日本歴史教育書目録

○楠 正 成

菊水の旗勳王の魁金剛山の城櫻井驛の訣別湊川の忠死は尤も世に著し

○新 田 義 貞

中黒の旗鎌倉攻め海道の進撃中國の追討北國の鎮撫は公の勳として見る可し

○兒 島 高 徳

車駕を途に奪ひ奉らんとして成らず十字の詩を櫻に題して赤誠を明にせしは備後三郎なり

○八 郎 爲 朝

白河殿に於て兄義朝に弓勢を示し大嶋より琉球に渡り益々武名を顯はせしは鎮西八郎の物語を見よ

○判 官 義 經

源氏の末路を嘆き鞍馬に入り陸奥に下り兄頼朝を援けて旭將軍を亡し平家を破りし軍略の効大なり

○大 石 良 雄

四十七義士の首領となりて故主の仇を復せし大智大勇の美談多し

○曾 我 兄 弟

富士の裾野に復讐の本懐を達せし十八年の艱難は孝子の譽と共に後世に傳へらる

○小 松 重 盛

小松内府の名を知らば必ず言はん忠を欲すれば孝ならず孝を欲すれば忠ならずと歴史に遺る逸事夥し

終